

いのちを吹き込む手 まつもとモノ語り

城下町・まつもとは、かつて民藝運動のメッカとなったまち。

そして今、全国から気鋭の作家たちが集い、

新たなモノ語りが紡がれている。

文／COLORS 写真／三代 尚



ヒトとモノが語る街

松本は、400年の時を超え、城郭を中心に栄える城下町だ。国宝・松本城は、雄大な北アルプスを借景とし、運がよければ天守と山容がお堀の水面に映り込む姿を見ることが出来る。

築城に際して結集した職人たちが、技術の粋をこの地に伝えた頃、時を同じくして伝統の民芸家具が発祥したという。江戸末期には庶民向けの家具として全国で知られるようになり、工芸の街・松本の礎を築いたものの、太平洋戦争の混乱の中、衰退を余儀なくされたのだった。

そしてその松本に、昭和20年代に「民衆的工芸」という新しい概念をもたらす民藝運動の波が押し寄せる。

日用の道具に美を見出した思想家で美学者の柳宗悦は、戦後、幾度となく松本を訪れて、衰退しかかっていた松本の民芸家具を復活させ、伝統工芸は日用の家具へと進化したのだった。

ヒトとモノ、技術が集まり、全国へと時代の波を巻き起こす。松本はそんな不思議な力を秘めた街なのだろう。

今や松本は、クラフトの街として広く知られ、全国から作り手が集まる現代工芸のメッカとなった。毎年5月には、工芸を愛する人々が全国から一堂に集う「クラフトフェアまつもと」が開催され、松本市全体が、工芸の五月として盛り上がり、街中がクラフト一色に染まる。

五月でなくとも、松本城界隈を散策すれば、白壁土蔵や古民家の風情を湛えたくギャラリーやレトロな建築に目が止まる。ギャラリーを覗き込み、ふと引き寄せられるように作品と出合った瞬間、新しいモノ語りが始まるのだ。

ヒトとモノ、技術が集い、独特の静謐な文化を育む街、松本。今回は、その街に暮らし、思い溢れるクラフト作品を生み出す気鋭の現代作家たちを訪ね、それぞれのモノ語りに耳を傾けてみることにした。

モノが語り掛けてくる時、そこには必ず作家の魂が木霊する。

松本は、400年の時を超え、城郭を中心に栄える城下町だ。国宝・松本城は、雄大な北アルプスを借景とし、運がよければ天守と山容がお堀の水面に映り込む姿を見ることが出来る。

築城に際して結集した職人たちが、技術の粋をこの地に伝えた頃、時を同じくして伝統の民芸家具が発祥したという。江戸末期には庶民向けの家具として全国で知られるようになり、工芸の街・松本の礎を築いたものの、太平洋戦争の混乱の中、衰退を余儀なくされたのだった。

そしてその松本に、昭和20年代に「民衆的工芸」という新しい概念をもたらす民藝運動の波が押し寄せる。

日用の道具に美を見出した思想家で美学者の柳宗悦は、戦後、幾度となく松本を訪れて、衰退しかかっていた松本の民芸家具を復活させ、伝統工芸は日用の家具へと進化したのだった。

ヒトとモノ、技術が集まり、全国へと時代の波を巻き起こす。松本はそんな不思議な力を秘めた街なのだろう。

今や松本は、クラフトの街として広く知られ、全国から作り手が集まる現代工芸のメッカとなった。毎年5月には、工芸を愛する人々が全国から一堂に集う「クラフトフェアまつもと」が開催され、松本市全体が、工芸の五月として盛り上がり、街中がクラフト一色に染まる。

五月でなくとも、松本城界隈を散策すれば、白壁土蔵や古民家の風情を湛えたくギャラリーやレトロな建築に目が止まる。ギャラリーを覗き込み、ふと引き寄せられるように作品と出合った瞬間、新しいモノ語りが始まるのだ。

ヒトとモノ、技術が集い、独特の静謐な文化を育む街、松本。今回は、その街に暮らし、思い溢れるクラフト作品を生み出す気鋭の現代作家たちを訪ね、それぞれのモノ語りに耳を傾けてみることにした。

モノが語り掛けてくる時、そこには必ず作家の魂が木霊する。





1.ナラで作った編み座の椅子。2.和紙をより合わせて作るペーパーコードで座面を編み上げた椅子。一般のペーパーコードよりも強度があり、たわみ難い。機能美を追求する姿勢が現れている。2.「椅子職人を選んだのは、自分の中にある合理的な木工への想いでした。質素で、簡素な美しさを大切にしたいですね」と語る指田さん。3.ゴツゴツとした肉厚の職人の手。4.子ども用の小さな椅子も手掛ける。2階のギャラリーでは、'かわいい椅子には旅をさせよ'と題した椅子展なども開催。「子どもたちが大喜びで座って、遊んでくれるのを見ると、うれしくてねえ」と笑顔がこぼれる。



自ら店主を務める店'グレインノート'2階のギャラリー。窓辺にさりげなく、サンダスタイルの椅子が置かれている。一時期、クラフトフェアの事務局として多くの仲間たちと集まっては議論を交わした思い出の場所でもある。

「モノ語り」

モノ作りに魅せられた作家たちを訪ね、作品の魂を聞こう。

耳を澄ませば、松本の風土が育む暮らし、そして作家の想いが響いてくる。

「突き詰めると、椅子はこうなる」

椅子職人 指田哲生

『民藝の父』柳宗悦が、こよなく愛した松本で、椅子を作り続けている男がいる。英国で育まれたウインザーチェアに魅せられ、自ら木工の世界へ飛び込んだ指田哲生さんだ。「サラリーマン時代、出張でよく訪れていた松本で、民芸家具に出合ったのです。中でも、ウインザーチェアは、背もたれに並んだ細いスピンドル(軸)と厚い座板、脚のフォルム、そのどれもが機能的で、美しくてね。ほとんど発作的に自分でこの椅子を作ろうと決めましたよ」と当時を振り返る。

かつて、柳宗悦とともに民藝運動に深く関わった工芸作家、バーナード・リーチが、自ら本場・英国のウインザーチェアの製作技術を指南したという松本で、本物の技術を身に付けたい

と、指田さんは迷うことなく当時勤めていた会社を辞め、松本の職業訓練校に飛び込んだ。

しかし、その頃の訓練校には、椅子を作ったことのある先生はおらず、とりあえず学校で家具作りの基礎を1年学び、松本民芸家具に就職。ようやく椅子職人としての修業がスタートした。

「デザインの要は曲線。人間が使うものですから、人間の体から生まれてくるなだらかな曲線がベースになります。シンプルで研ぎ澄まされた構造は、合理性を考えるとそれ以外にないと思える説得力がある。椅子も、突き詰めていくと機能美ですね。使う木材はさまざまですが、堅くて手強いものほど、美しく仕上がるんですよ。丁寧に削っていくうちに、やがて美しい肌を見

せてくれる。手間暇を掛けたモノほど、かわいいですねえ」。

指田さんは、その頑なな職人魂で、シンプルな機能美を追求し続けた。ひとつの椅子の制作に費やす期間は、約3カ月。特に座り心地を左右する「座削り」に心血を注いだ。しかし、理想の椅子を目指す指田さんに、ある日転機が訪れる。椅子好きの常連のひと言が、指田さんの求道的なスタイルに一石を投じたのだ。

「世界には、編み座の椅子もあれば、皮の製品もある。座板ばかりじゃ、余りにも冒険心がなさすぎるってね。まさに目からウロコの瞬間でした。それからいろいろな椅子を手掛けながら、試行錯誤してきました。中でも編み座の椅子は、椅子職人とし

ての自分の歩みの集大成といえるかもしれません。その意味でも、お客さまに育てていただいた部分は大きいですね」。

松本にやって来て40年。最初は古い建造物が風情を湛える町並みに惹かれ、徐々に民芸家具や伝統工芸品に興味を抱くようになり、運命的な椅子との出会いから家具職人を志した指田さんは言う。「松本は、大自然が近いのが良いですね。自然はモノづくりを触発する存在であり、家族のように共に生きていく存在でもあります。休みの日には自転車でアルプスの麓を走りまわったり、無農薬の米を作るのが楽しみです。僕にとって、自分らしい生き方ができる場所、それが松本です」。



木工作家4人で集まってオープンした'グレインノート'は、今や松本を代表する老舗ギャラリー。「同じ思いを持つ作家たちが自分の背中を押してくれた。僕にとって大切な場所です」と指田さん

グレインノート
長野県松本市中央3-5-5
tel.0263-32-8850
営業時間/10:00~18:00
定休日/水曜



「土が喜ぶものを
作りたい」

焼きもの作家
金井三和

「山のロマンに
魅せられて」

ジュエリー作家
山本 葵



8.馬のオブジェは車輪も土。ガタンゴトン動く様が微笑ましい。9.「金属で作れるものが、なぜ土でできないの?」という素朴な疑問から挑戦した時計。10.金井さんはイラストも描く。11.「スコープ」(上・左)や「木の実」と名付けられた作品たち。12.小鳥のオブジェは、箸置きに使う人も。「昔はもっと発想が自由だった。今は『作ろう』と思うことが少し残念」と自らを律する金井さん。13.白壁土蔵の2階に構えた工房。14.土を動かしていくうちに自然と形が生まれ出る瞬間が、作る楽しみ。



「来る人を拒まず、大らかに受け入れる」そんな風土が松本にはある。いや、雄大な自然が呼びよせるとでも言おうか。松本とその周辺には、多くの若きクラフトマンが集い、思いおもいに創作活動に打ち込んでいる。

「山が大好きで、少しでもそばにいたい」との想いから、千葉から長野へ移住し、北アルプスの名峰群を見渡せる安曇野に工房を構える山本葵さんは、ジュエリー作家。その作品のモチーフも、野鳥や高山植物、クライマーといった山に因んだものが多い。北アルプスを中心に長野県の中

「絵の専門学校に通っていたこともあって、土の風合いを生かす絵付けで自然体の作品を作りたいと思い、試行錯誤を続けました」と、焼き物作家としてスタートした当時を振り返る

はじめは絵本作家になりたかったという金井さんが、陶芸に出会ったのは、まだ学生のころ。おばさんが手習いで作った器に満たされた食卓についた経験がきっかけだった。

「土を動かしていくうちに自然と形が生まれ出る瞬間が、作る楽しみ。」

金井さんは、松本生まれの松本育ち。「これからは、故郷の土やリಂಗー灰などを材料にした作品や土で表現できないパーツを、葵ちゃんに習って作ってみたりもしたいですね」と微笑んだ。山本さんと金井さんは、一緒に展示会を開くなど交流も深い。

この二人のように、松本の若き作家たちは、作品を通して交流の輪を広げながら、ゆっくりと、そして着実に、自らの作品を育んでいる。

金井さん。森と森に住む生き物をモチーフに、まるで松本の自然をコラーージュしたかのような作風は、絵本の中のメルヘンの世界を思わせる。「土と手が仲良くなつて作品が生まれていく感覚。土をこねながら温度や堅さに向き合ううちに、土はどんなカタチになりたいかなあって考えます。土が喜んでくれる作品を作りたいんです」。

山本さん。山に因んだものが多い。北アルプスを中心に長野県の中

「山が大好きで、少しでもそばにいたい」との想いから、千葉から長野へ移住し、北アルプスの名峰群を見渡せる安曇野に工房を構える山本葵さんは、ジュエリー作家。その作品のモチーフも、野鳥や高山植物、クライマーといった山に因んだものが多い。北アルプスを中心に長野県の中

「山が大好きで、少しでもそばにいたい」との想いから、千葉から長野へ移住し、北アルプスの名峰群を見渡せる安曇野に工房を構える山本葵さんは、ジュエリー作家。その作品のモチーフも、野鳥や高山植物、クライマーといった山に因んだものが多い。北アルプスを中心に長野県の中

「山が大好きで、少しでもそばにいたい」との想いから、千葉から長野へ移住し、北アルプスの名峰群を見渡せる安曇野に工房を構える山本葵さんは、ジュエリー作家。その作品のモチーフも、野鳥や高山植物、クライマーといった山に因んだものが多い。北アルプスを中心に長野県の中

「山が大好きで、少しでもそばにいたい」との想いから、千葉から長野へ移住し、北アルプスの名峰群を見渡せる安曇野に工房を構える山本葵さんは、ジュエリー作家。その作品のモチーフも、野鳥や高山植物、クライマーといった山に因んだものが多い。北アルプスを中心に長野県の中

「山が大好きで、少しでもそばにいたい」との想いから、千葉から長野へ移住し、北アルプスの名峰群を見渡せる安曇野に工房を構える山本葵さんは、ジュエリー作家。その作品のモチーフも、野鳥や高山植物、クライマーといった山に因んだものが多い。北アルプスを中心に長野県の中

「山が大好きで、少しでもそばにいたい」との想いから、千葉から長野へ移住し、北アルプスの名峰群を見渡せる安曇野に工房を構える山本葵さんは、ジュエリー作家。その作品のモチーフも、野鳥や高山植物、クライマーといった山に因んだものが多い。北アルプスを中心に長野県の中

金属と土で紡ぐ 彼女のまつもと物語

1.「岳都・松本 山岳フォーラム2014」用に作った記念バッジ。2.山で描いたスケッチを基に作品のモチーフを起こしていく。3.四季折々の高山植物から生まれた作品たち。4.結婚式ももちろん山で。上高地で挙式した思い出の一枚。5月には第一子が生まれ、待望のお母さんに。5.作業場には、山登りのお供、ラ・スボルティエバのガンダルフガイド(登山靴)が。6.昭和レトロな佇まいの工房。『世代を超えて受け継がれてきたものが大好きなんです』と葵さんはにっこり。7.打つたびにになる小さな「おたふく鐘(づち)」の柄も、時計ヤットコの先も、自分で加工して使いやすく。





7



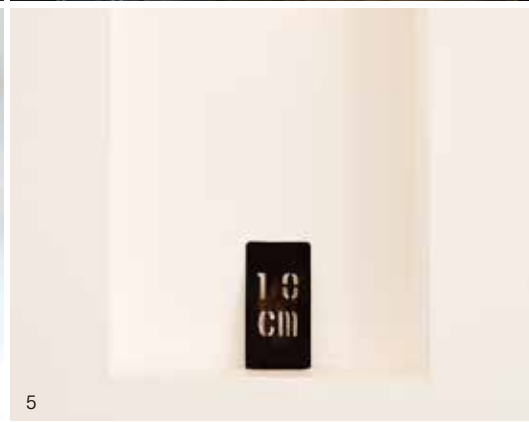
4



1



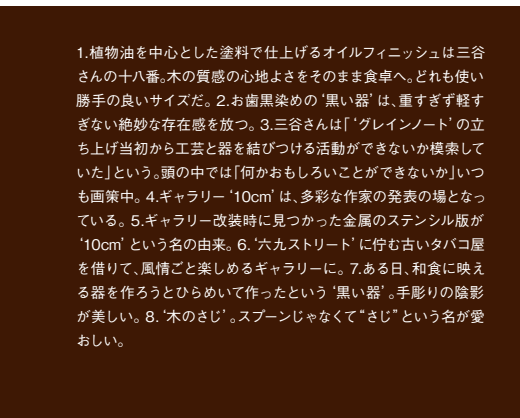
8



5



2



1.植物油を中心とした塗料で仕上げるオイルフィニッシュは三谷さんの十八番。木の質感の心地よさをそのまま食卓へ。どれも使い勝手の良いサイズだ。2.お歯黒染めの「黒い器」は、重すぎず軽すぎない絶妙な存在感を放つ。3.三谷さんは「グレイノード」の立ち上げ当初から工芸と器を結びつける活動ができないか模索していた」という。頭の中では「何かおもしろいことができないか」いつも画策中。4.ギャラリー「10cm」は、多彩な作家の発表の場となっている。5.ギャラリー改装時に見つけた金属のステンシル版が「10cm」という名の由来。6.「六九ストリート」に佇む古いタバコ屋を借りて、風情ごと楽しめるギャラリーに。7.ある日、和食に映える器を作ろうとひらめいて作ったという「黒い器」。手彫りの陰影が美しい。8.「木のさじ」。スプーンじゃなくて「さじ」という名が愛おしい。



6



3



「グレイノード」の立ち上げで前述の指田さんと音楽を共にした三谷さん。「周りが家具を作る人ばかりだったから。他の方向で木の可能性を探りたいと思って、僕は器にしました」と笑う。使い続けるうちに風合いを増すのが、木製バターケースの楽しみ。

「その豊かな時間を作るためにモノは存在する」

木エディタイナー 三谷龍二

「モノだけを作るのではなく、モノが使われる空間そのものを作ることの大切さを伝えていきたい」。そんな想いから松本へ移住して約35年、日用使いの木の器を提案し、その世界を広げてきた三谷龍二さんを訪ねた。

福井生まれの三谷さんにとって、旅の途中にふらりと立ち寄った松本が、特別な場所になった。「昔から変わることのない地形に人が懸命にまるでしがみつこうように住んでいる風景が愛おしい。街として機能しながらも、30分あれば森の中に入っていけるような自然と人とのバランス。それは手を加え過ぎず、自然を残す僕の作品とも共通するものがあるように思うのです。木の質感を残しつつ、機能的で暮らしの中にずっと溶け込んで

いくような器。僕が松本を好きな理由はそういうところにもあるのだと思います」。

そんな三谷さんの思いを映し出した無垢なる器の原点が、写真のバターケースだった。伊丹十三がエッセイ『女たちよー』の中で、「いいバターケースがない」と嘆いていたのを思い出して作ったのだと、三谷さんは振り返る。「器一筋で行こうと決めたのは、1991年。バブル期も終わり、90年代後半には、人々が丁寧な暮らしに戻ろうとした時代でした。昔からある民藝といえば重厚な和食器のイメージだけど、日常の食卓ではもっと軽やかで、パンの食事にも合う器のほうがいい。その提案のひとつが、バターケースだったんです。木製品の仕上げや手入れにオイル

のを作って、幸福な食卓を提案していきたいですね」。

三谷さんといえば、グレイノードにはじまり、グラフトフェアまつもと、工芸の五月、など、現在のグラフトの街・松本の代名詞とも言うべきアイコンの立ち上げに参画したキーマン。そこに暮らす人々が自発的に運動を起こし、自然に広がっていくことが素晴らしいと相好を崩す。「人と人がつながるおもしろさが松本にはあります。環境と空間は、どこかでモノ作りに影響すると思うんですよ。自然と共存するモノ作り」が松本のテーマ。ぜひ実際にこの場所に立つて、体感してほしいですね」。



「10cm」は、三谷さんの作品を購入できる全国で唯一の常設展示ギャラリー。「この空間全てを味わってほしい」と、三谷さん。「モノを使う空間の豊かさを伝えたい。このギャラリーもそんな想いで作りました」。

10cm
長野県松本市大手2-4-37
tel.0263-88-6210
営業時間／11:00～18:00
営業日／金・土・日曜、祝日

一見どこにでもある石ころなのに、ヘッドホンをジャックに差し込めば、お気に入りの音楽が流れてくるその名も 'Rock in Rock' (左)。ネーミングにも伊藤さんの遊び心が窺われる。やわらかな質感につだまされてしまうバグ(右)ももちろん石!



昔見たアパートHEIGHTのポスターにインスパイアされて生まれたという代表作、笑う石。「白い石、黒い石、いろんな石が並んでも、にっこり笑えば白い歯。皆一緒だよ」というメッセージが込められている。この「三人岩女」は伊藤さん流の笑顔がはじけたお雛さまである



湾岸戦争を舞台に、銃を手にした無数の英兵たちと地上に突き刺さったミサイル。元気のいい女性たちが、わらわらと集まって、「まったく、男どもは何やってんだろかね」と、ミサイルに水を掛けている。1998年に制作された「世紀末のお片付け」なるタイトルの作品には、「ファスナーを締めさえすれば、戦争は終わるよ」という時代へのアンチテーゼが込められている



“笑う石”のシリーズは伊藤さんもお気に入りの作品群。「従弟が歯科技工士でね、中にはセラミックの高級な歯を入れている作品(ヤツ)もいるんですよ」と笑う。河原に転がる石が、笑うも、音を出すも、伊藤さんの見立て次第。手が自在に動きだし、石に命を吹き込んでいく

「石が笑い、しゃべり出す パラドックスが快感だね」

ストーンアーティスト 伊藤博敏

ニヤリと皮肉な笑いを投げかける石がいて驚いた。「彼」は「調子はどうだい?」と、歯をむき出しにしてしゃべりだし、心を驚掴みにしてしまう。

そんな驚く人間どもを垣間見て、ニヤリとほくそ笑むのが伊藤博敏さん。石材店の五代目は、シュールレアリスムを具現化した石のアート作品で世界をうならせている。

「とにかく人を驚かせるのが好き」だという伊藤さんの作品は、どれも石の固定概念を覆すモノばかり。石だけど石に見えないパラドックスという制作コンセプト自体、とってもシュールである。

大学は工芸科へ進み、敢えて石ではなく金属を学んだ。彫刻やプロダクトデザインなど、多感

な学生時代に受けた影響は、今の作品にも現れている。「石をやるなら自然石の風合いを生かしたい。いずれは、金属などの異素材と石を組み合わせた作品を作りたいという思いがありました。石Ⅱ墓石という先入観が強い世の中に、工芸という切り口で石の魅力を発信したくて、作品を作り始めたんです」。

「見立て」が大好きという伊藤さん。河原に立ち、自然の中に存在する石にインスパイアされることも多い。化石に封じ込められた虫の生に思いを馳せるように、二つと同じものがない石を持つ物語を掘り起こしていく。「石を袋に見立てて考えるんですよ。人間も言わばひとつの袋。どこに口を作ろうかと探っていくと、そのうち『ここでしょ』って石

が教えてくれる瞬間があるんです。そこに歯を入れたり、ファスナーを縫い付ける異質なアクションをつけていく。石から蜜がとろっと流れ出たり、石の一部が爆発するようなアクションを付けたときに、石はどんな表情をするのかなって考える。それが楽しみで、新しいアクションをずっと探し続けています」。

何かをしようとする瞬間を石に留めるのではなく、その先の物語を見る人に想像させることが伊藤さんの狙い。ファスナーを全て開けたり、閉めたりしないのは、そのためだ。

一見、おもしろ楽しい伊藤さんのストーンアートだが、アパートヘイトやギリシャショックなど、社

会風刺が効いた作品も多い。石の持ち味を生かしながら、ファスナーの内側と外側を、ウイットに富んだ世界観で描き出す。「じわつと笑ってほしいんだよね」と言いながら笑い、はにかむ伊藤さんは、いたずらっ子がそのまま大人になったように見える。

本業の石材店でも、石の可能性を探っていきたいという思いは深い。「アートをきっかけにして石の可能性を伝えたいんです。お墓の在り方や死生観も時代とともに移り変わっていく。作品を見た人が、『石ってこんなことができるんだ』と気付いて、創造力豊かなお墓を作れたらいいですね。ファスナーは付けませんけど(笑)」。



松本に古くから続く「伊藤石材店」の2階が、アート空間「自遊石」。「墓石の打ち合わせの後に、お客様がギャラリーに上がって来て、笑顔が見られるのがうれしい」という。墓の在り方や死生観が変わりつつある今、終活に一石を投じる場所といえるかもしれない

自遊石
長野県松本市中央3-7-20
tel.0263-32-5265
営業時間/8:00~17:00
定休日/日曜

「使い継ぐ文化があってもいい

熟成する本物の道具を作り続けたい」

江戸指物師 前田純一

東京の宝町で江戸指物師(*)の家系に三代目として生まれた前田純一さんは、鎌倉を経て、松本に移り住んで約30年。活動の拠点は変わっても、日本の伝統工芸である指物の可能性を一貫して追求し続けている。

「松本には民藝運動の揺籃となった歴史があり、古い白壁土蔵や町並み、伝統工芸がきちんと守り継がれていて、先人たちの苦勞が残っている。そこが魅力でした」という純一さん。母に次いで父を亡くした時に松本への移住を決め、家も家財道具も全て捨てて自然の中に飛び込んだ。美ヶ原の麓で丸太小屋を借りて仮の住処としながら、まずは自分たちの手で家を建てることから始めたという。「家を建てた残材で初めて自分たち家族が使う家具を作った。楽しかったねえ。勉強になったし、椅子やテーブルを作るおもしろさを知

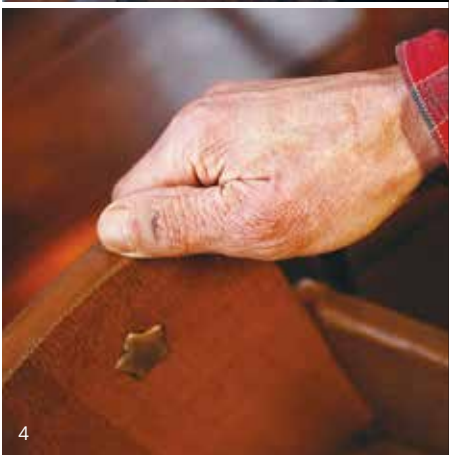
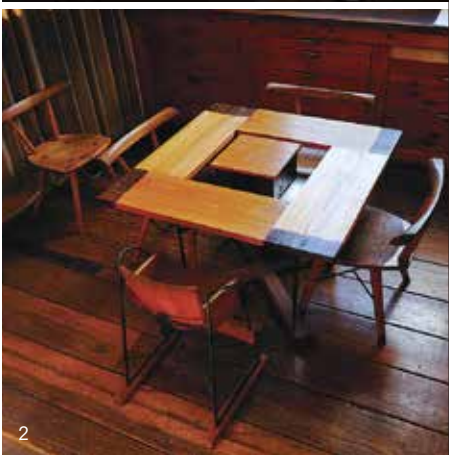
り、『これだー』って思った」。

指物師は本来、大名や公家が求める至高の木工作品を作るのも仕事で、彼らが日本の工芸のクオリティーを支え、世襲により受け継いできた。だからこそ、指物師として椅子やテーブルを作ることにとまどいもあり、それを打ち破る契機となったのが、松本への移住だった。純一さんが小柄な奥さんのために脚を短く設えたサークルチェアは、その挑戦の象徴だ。「現代の暮らしに必要なのは、日本人の体に合う和の椅子。3年使うと手放せなくなるような家具を作りたい。これからは、今まで捨ててきたモノをつないでいく文化があって

「もったいなくて使えない

その言葉でやっと工芸の世界に立てた」

木工家 前田大作



1.「名もない職人が作るのが民藝。伝統工芸を守り継ぐのに肩書はいらないよ」という純一さん。江戸っ子だ。2.昔の囲炉裏のある風景を現代に……と提案した‘囲炉裏テーブル’。3.大作さんに娘が生まれた時に作ったカート。純一さんは、東日本震災の後、子どもたちに希望を与えたいとの想いから、星をあしらった子ども向けの作品群を製作している。4.「人間は鉤の手伝いをしているだけ」と、名人なればこそ謙虚な純一さん。

*江戸指物とは、将軍家や大名などの武家や商人、歌舞伎役者など江戸の町を中心に発展した箱物木工細工のこと。伝統的指物は、金具をいっさい使わず、木だけで仕上げていく。

もいい。使い継ぐ家具、使うほどに熟成していく木の魅力を伝えたいですね」。

松本でゼロからの住まい作りが始まったころ、四代目の大作さんは小学3年生。父が作った家、そして父が作った家具に囲まれて育った。「ないものは作る」という父の背中が、モノ作りの出発点」と語る大作さんは、23歳で大手家具メーカーを退社し、指物師の道を志願した時に「師匠」からひとつの鉤を渡され

たという。「鉤を仕込むために必要なノミを買い、そのノミを自分の道具に仕立て、人並みに使えるような鉤に仕上げるだけに3〜4年掛かりましたね」。

師匠の父・純一さんは「見て覚え」という昔ながらの修業スタイル。現金収入がない上に、満足に作れる技術もなかった当時の大作さんは、材木店に頭を下げて端材を分けてもらい、小さなテーブルを作り、何年もかけてネット通販で完売した。「得たお

金はわずかでしたが、生業とは何か、身にしてみても教えられませんでした」。試行錯誤を繰り返す息子

を、何も言わず見守ってきた純一さんと、父の大きな背中を追う大作さん。昨年に最後の弟子が一本立ちして、ようやく、父と子として指物の話ができるようになったと笑う。

大作さんが結婚し、子どもが生まれると、純一さんはまた生き生きと新たな「家族のための家具」を作りはじめた。ベビー

カートやベビーチェア、小さな椅子など、孫の成長に合わせて、家具も成長し続けている。

自らの大切なヒトの暮らしのために生み出される純一さんの新しい作品群は、多くの人々に支持され、前田工房の新たなマスターピースになっていった。これぞまさしく「現代の民藝」。「真に価値のあるものは、常に新しさを含んでいる」という柳宗悦の言葉ながらのモノ語りが、ここで紡がれていた。



松本市から車で約40分。美ヶ原高原の山間で、在るがままの暮らしと創作活動に動しむ前田さん親子。白樺やカラマツが生い茂る林の中で、江戸伝統的指物が進化を続けている。

前田木藝工房
長野県松本市入山辺8961-1345
tel.0263-31-2634
※注文制作のみ。事前に要連絡

特集 いのちを吹き込む手 まつもとモノ語り



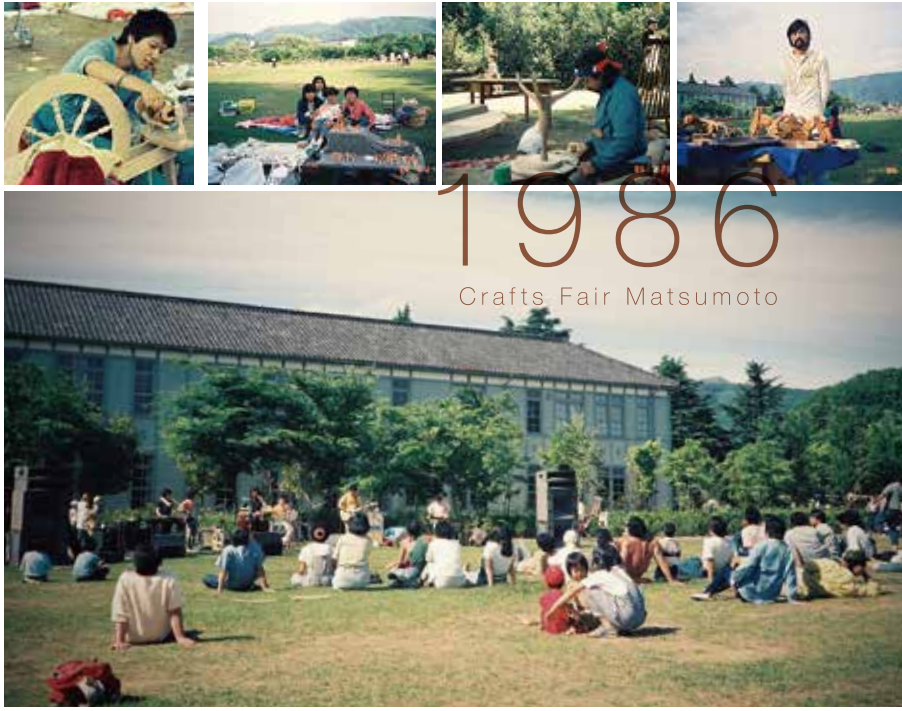
5.大作さんが大事に作り続けている鯉節削り。磨き抜かれたモノが、手間暇を愛でる暮らしと、家族の語らいを生む。6.弟子入りをして16年。重箱や菓子箱など、現代のニーズに合う指物を作る大作さんの手には、師匠である父からもらった鉤が。「世界の人々が和の文化に注目する時代。最新の日本の文化も常に追求したいのです」。7.工房に父と二人で立つようになったのは、最近のこと。「父と指物の話ができるようになったことが、うれしい」。8.信州カラマツで作った器。「用途の少ない地元の木材があれば、それを生かしていくのが僕たちの世代の、ここに住む人間の役目。カッコいい提案をしたいですね」。

出張から戻った大作さんを「どうだった?」と気遣う純一さん。スタイリッシュな鯉節削りを作り反響を呼んだ大作さんに、父は「お前カッコいいじゃん!」と声を掛けたという。「買ってくれたお客様が「もったいなくて使えない」と言ってくれた時、ようやく工芸の世界に立てた実感がありました。少しは四代目を継げたと思った瞬間でしたわ」。

1986年、'クラフトフェアまつもと' スタートから2年目(写真右ページ)の会場風景。バブル期でモノがあふれた時代に「日本の本物を知ってほしい」という願いを込めて、多くの作家たちが「あがたの森公園」に集まった。作り手と作り手、そして作り手と使い手の交流は、現在も変わることのない同フェアのテーマ。創作風景と作品、そこに携わる人々と語らうひとときを求めて、毎年全国から5万人ものファンが訪れる(写真左ページ)

2014

Crafts Fair Matsumoto



「対談」

はじまりは、ここから クラフトフェアまつもと、今昔物語

今回、作品をご紹介した伊藤博敏さんと指田哲夫さんは、今や国内随一の規模に成長した野外工芸フェア「クラフトフェアまつもと」の立ち上げメンバーであり、これまで30年間の長きにわたり、その運営を陰で支えてこられた。現在事務局で縁の下力持ちとして活動が続ける、松本クラフト推進協会、竹内眞理子さんを迎え、御三方に、これまでの歩みと、それぞれの想いを語っていただいた。

「当時、松本には全国から作り手が集まって来て、ちよūdぶつかりあっているような時代でした」

伊藤 クラフトフェアまつもとが始まって30年、いろいろありました。当時、私は25歳ぐらいで、先輩方が30〜40代。私は異素材の工芸家たちとの交流が面白くて、参加させてもらおうと顔を出したんだけど、海外のクラフトフェアを参考にしたという話を聞いて、驚くわけです。視点がいきなりグローバルだな、と(笑)。

指田 フェア開催の一年前、海外のクラフトフェアを見てきた蒔田卓坪さんと小田時男(※1)さんが、アースコレクションという店(※2)で、第一回の準備会合を開いたんだ。その頃、僕は「グレイノット」というギャラリーを木工仲間4人と中町通りにオープンしたばかりで、外で店

に来てくれるお客さんと触れ合う場が必要だし、オープンな野外フェアにすごく魅力を感じたんだよ。だけど、やったこともない連中ばかりだから、あるのは勢いだけ(笑)。その時は僕も37歳くらいでまだ若かったからね。

当時、松本には全国から作り手が集まって来て、ちよūdぶつかりあっているような時代だった。

伊藤 ぶつかり合ってたと言うとカッコいいけど、実際は吹き溜まってた(笑)。

指田 まあ、とにかくいろんな出会いが始まりだね。その関係が今まで続くとは思ってなかったけど(笑)。やるならカッコしくないと思っていた、あがたの森公園を借りたくても、「芝生の上

に物を置いたり、人が立ち入って寝ころがるなんてとんでもない。一切まかりならん」って門前払い。全くどうしていいかわからない状態から始まったね。

竹内 当時は一回集まることに

メンバーで500円出して、活動資金にしていたよね。

指田 そんな微々たるお金だけど「将来はクラフトミュージアムを建てるんだ」って、みんな夢だけは大きかった(笑)。

「10年前から始めた作家も、3日前から始めた作家も、同じ土俵で戦うのがクラフトフェアだ」

竹内 小田くんが撮影してきたアメリカのフェアでは、それぞれのブースでテント張ってたけど、私たちは建材屋で仕入れてきたブルーシート敷いてね。案内板もないから、とりあえず自分の場所取って、そこに作品を並べようって。でも初日の朝に風が来て、避難するの大変。あれ以来、もう怖いものなしになったよね(笑)。

指田 5月の最終土・日は一番天気が安定しているデータがあるって、誰かが言ったんだよ。なのに何回も嵐になった(笑)。

竹内 最初の頃は出展者も少なくて、芝生の上でみんなのびのびとやってたわね。「ゆつくりお散歩しながら見てください」くらいの気持ちで、来場者をた

くさん呼ぼうという考えはなかったわ。

指田 集客より作り手の交流が主目的だったから、出展者のためのイベントもいろいろ考えたなあ。

伊藤 そうそう、材料屋を呼べば、作家がそこで買って帰れるからいいかなあ、なんて。

竹内 本屋もそうね。

伊藤 作家のためになりそうな映画を上映したり、まず自分たちが楽しむのが先決って感じで、来場者目線はまるでなかったなあ(笑)。でも逆にそれが良かったのか、プロ用の道具や素材を買い取るという評判が伝わって、素人の方たちがどんどん来るようになった。

指田 かなりの速さで全国的



ストーンアーティスト
伊藤博敏

松本市生まれ。'伊藤石材店'の四代目として家業を営む傍らで、石を使った大胆なアート作品を精力的に発表。世界的に注目を集めている。
※インタビュー 18ページ



椅子職人
指田哲生

東京都生まれ。大学卒業後、一般企業に勤め、松本で民藝に魅せられて移住。'松本民芸家具'で修行した後、独立して'グレイノット'を立ち上げる。現オーナー。
※インタビュー 12ページ



松本クラフト推進協会
竹内眞理子

神奈川県生まれ。関西で機織りを学び、25歳の時に松本へ。'クラフトフェアまつもと'立ち上げに携わる。現在は神奈川から毎週のように松本へ通い、'松本クラフト推進協会'の運営を支えている。

※1 1988〜1994年まで'松本クラフト推進協会'代表を務めた椅子職人の蒔田卓坪(まいた たくへい)さんと'クラフトフェアまつもと'第1〜3回事務局長と努めた家具職人の小田時男さん。

※2 80年代に松本で人気を集めた店。雑貨や洋服などを扱っていた。

にクラフトフェアの波が伝播したね。前例がなかったらしいよ。

竹内 手作り市、みたいなものはあったんですよ。でも、作り手が主催する野外フェアというのは日本では初めてでした。

伊藤 作り手が自分の作品を

売らなければならない、という最低限のルールだけは決めてあったから、小売の人は参加できない。ここの参加基準を緩めると、フリーマーケットとか、骨董市とかと同じになっちゃう。

指田 フェアに参加するには、応募用紙を書くんだけど、プレゼンテーションも含めて自己表現。その力を付けておかないと、個人作家としては勝負できないというポリシーがあった。選考制度を導入したのは、応募者が300人を超えた10回目だったかな。選考制度の導入は委員会の中でもかなりもめて、蒔田さんは「10年前から始めた奴も、3日前から始めた奴も、同じ土俵で戦うのがクラフトフェアだ!」なんてタンカ切って(笑)。でもあの頃は、みんなフェアの準備に疲れ切っていたよね。

伊藤 メンバー交代が進まず、

新しい人も入ってこない悩ましい時期でね。蒔田加代さん（*3）をはじめ、女性をメインに立てるようにしたら、物事が急にスムーズに回り出した（笑）。

指田 男は、それぞれが理屈こねるからなかなかまとまらない。そんな時、女性陣が立ち上がって、「あんたたちがやらないなら私たちがやるわよ」と（笑）。結果、男連中がやることなくなっちゃって、懇親会を開くため

「作品は新陳代謝しつつルールは守り継がれるのがいい」

指田 むさい親父たちの間に女性や若手が入ってくるのはさぞや大変だったと思うけど、今じゃ親父連中の方がマイノリティ。最近ではボランティアで、一般の会社員も参画してくれるのが

ありがたいよね。竹内さんなんか遠路横浜から通いで仕切ってくれて、本当に感謝してるよ。

竹内 またうまいこと言ってる（笑）。最初は楽だから頼むよって、小田（時男）くんにだまされて横浜から来たんだけど、やりだしたら、いやもう、とんでもな

のバー設営に精を出したりしてね。あがたの森 講堂で展示会をやった時も、パネルから什器まであつという間に全部自前で

作った。みんな大工みたいなものだから、そういう仕事は早いはい（笑）。

竹内 看板を書くのも、作るのも、皆スタッフ。フェア直前になると、スタッフが細い筆に白いペンキ付けて、一生懸命レタリングしてね。

い（笑）。でも最近は、ただのボランティアではなく、もうちょっと踏み込んで深く関わってみたいと思ってくれる人たちが増えてきたことが、素直にうれしいです。

指田 高山辺りから来る人もいるし、初期のメンバーも、何かあると飛んできてくれる。ありがたいことだよ。

竹内 時代も、作り手も、使い手も変わってきているし、私たちが始めた頃のフェアと今のフェアは、少し違った形になってきて

だけどね、ほんととは（笑）。

竹内 今はスマホで出展者とコミュニケーションが取れる時代じゃないですか。親切な地図を作るよりも、SNSとか活用した方が面白そう。

伊藤 当初から作り手と使い手の出会いの場でありたいという思いがあるから、来場者は作り手と平等なのね。

竹内 そう、フェアで、出展者と、来場者、という言い方をするのも、私たちからのメッセージ。

「夢だけはでっかくクラフトミュージアム構想」

指田 でもなんやかんや言いながら、続けていかないとな。最近、工芸の五月、という1カ月の催しで、楽しいイベントを企画する商店街の人たちが始めているじゃない。それって素晴らしいことだと思う。工芸やクラフトを、松本のイメージのひとつにするなら、そういう地域全体への拡

がりが大事。
伊藤 クラフトフェアで選考制度を取り入れあたりから、地元

いる。でもそれでいいと思うんですよ。30年間、やり続けて来られたのは、やっぱり最初のスター

トが間違ってたから。そこさえ変わらなければいいんです。

指田 まつもととのクラフトフェアは、昔も今もしばりのない自由なイベントで、フェア当日、ス

タートの挨拶もなければ終わりの挨拶もない。いつの間にか人がうわつと集まって、なんとなく散って終わり。一時期、早朝の場所取り合戦が問題になって、じゃあラインくらい引くかって話し合ったけど、みんな大人なんだから、どうすればいいか、それぞれが自分で考えようよって。

だから、5万人も集まるイベントなのにゴミが一切出ない。ルールがないようにできて、暗黙のルールはきちんとある。

竹内 そう。毎年、出展者の3

「使い手と作り手の出会いの場でありたいね」

伊藤 でも、クレマーが増えた時期もあったよ。

竹内 来場者や出展者から、どうして区割りがないんだとか、

賭っているから、収支的には赤字。主催する方が楽しんじゃってるから儲からないんだな、きつと（笑）。儲からないついでに話すと、これから先は僕の個人的な妄想なんだけど、いつか松本にクラフトミュージアムを作って、

伊藤 松本を工芸の発信地にするには然るべき拠点も欲しいし、アーカイブをどう残していくかという課題もある。クラフトミュージアム構想も、ただ「国民

竹内 出た、世界に向けて、（笑）。となるともう百年の計ですね。

伊藤 夢だけはでっかく（笑）
指田 ならばミュージアムの隣は全部オープンカフェで。私は外で飲みたい。

竹内 これだから、男が語り始めるとなかなか話が進まないのよね（笑）。



★3 会計から理事まで事務局の運営を支えた立役者。蒔田卓平さんの奥様。

現在も推進協会の代表理事を務める伊藤さんと、運営を裏で支え続けてきた竹内さんに後を託して、ひと足先に理事を退いた指田さん。安堵の表情を浮かべつつも、「これからはクラフトピクニックなど、子どもたちが楽しんでくれるイベントを中心に携わっていきたい」と目を輝かせる。クラフトフェアから始まった活動は、会を退いてもまた次のステージへつながっていく。松本が好きで、松本が好きでヒトが好きだから、モノ作りにも、まちづくりに身も惜しむことはない。

Crafts Fair Matsumoto Since 1985

